

展示報告

企画展「手取川の植物」が伝える石川県の宝もの

川原健彰さんの撮影写真と約40年たった今の手取川の風景をならべて紹介した展示コーナー



手取川ダムの建設後すぐに、手取川の植物調査を個人で熱心に行われ、膨大な数の植物標本を採集した方がいました。その名は川原健彰さん。1985年から6年間にわたって、405日間もの日数を調査に費やした川原さんの調査記録がなければ、企画展「手取川の植物」(会期:2024年7月20日から10月27日、後援:北國新聞社)はできなかったでしょう。

川原さんは、自身の調査の結果を報告書『手取川の植物』(全六報 1985年～1990年の調査報告)にまとめました。『手取川の植物』は、十分な調査が行われてこなかった手取川の植物研究を進めた川原さんの偉業です。第一報から第六報までの各報告内には、それぞれ1年間の調査記録による植物目録があります。その他、写真による植物紹介や植生調査地点の植生図、重要な植物群落の分布など、貴重な記録が掲載されています。『手取川の植物』は、以後の手取川の自然環境調査などで、今も重要な文献となっています。

展示では、川原さんの報告と2022年から実施している手取川環境総合調査の樹木・植物班の調査結果から、手取川の植物がどのように変化したのかを紹介しました。手取川環境総合調査は北國新聞創刊130年記念事業の一環として実施されたものです。天狗壁川原(能美市)の調査結果から、川原さんの調査時と比べて、一年草や外来種、路傍や空き地で見られる種が増えていることなど、植物相の変遷が明らかになりました。今ではごく普通にみられ、ひろがっている外来種が、川原さんの調査時は珍しかったこともわかります。川原さんは『手取川の植物』第三報で、外来種のキダチコンギクを、初めて見た同定できなかった植物としています。昔はキダチコンギクの分布は限られていたのです。現在いたるとこ

ろにあるオオキンケイギク(2006年に特定外来生物に指定)やセイタカアワダチソウは、川原さんの植生調査地では出現しません。それぞれ植物目録で「みかん色の花が美しい」「細毛が目立つ」と記述があり、悪い表現をしていません。当時は外来種の勢いはあまり感じられなかったのでしょう。

展示した川原さんの標本はほんの一部です。川原さんがとてつもない量の標本を採集したことが伝わるように、ボリュームのイメージがつく展示コーナーを設けました(写真1)。左側の押し葉標本の山の150倍以上もの量がご自宅にあったかと思うと驚きます。川原さんは手取川のみならず、県内くまなく歩き、県外へも採集に出かけました。これらの川原さんの標本は当館に収蔵され、絶滅危惧種を掲載するレッドデータブックの作成に活用されました。

企画展「手取川の植物」は、石川県の宝ものとして手取川流域に遺された植物の昔と今を伝えました。まず一つの宝ものは、絶滅危惧種の貴重な生育地である手取川沿いの水辺や草地、増水が起こる環境です。そして、それ以外の宝ものがあります。川原さんをはじめとする植物調査者の調査記録と標本です。石川県の宝ものを未来に伝えてゆきたいものです。

(副館長 中野 真理子)

写真1

川原健彰さんや手取川環境総合調査の採集標本の量のイメージを伝える展示コーナー





マコシカ州立公園

脊椎動物化石を研究している私は、今夏、アメリカでの野外調査活動を再開しました。コロナ禍もあり、2018年以来、実に6年ぶりの実施となりました。

今回もモンタナ州立大学付属ロッキー博物館に協力する形で、モンタナ州東部のグレンダイブ市にある、マコシカ州立公園で調査を実施しました。同公園内では、白亜紀末期から古第三紀初期にかけて連続的に形成された地層が分布しており、両地質時代の境界も観察できます。調査団は、恐竜が産出するヘル・クリーク層(上部白亜系)内で発掘や調査をしましたが、白亜紀～古第三紀にかけた動物群の変遷を研究している私は、同層の上位を整合的に覆うフォート・ユニオン層(下部暁新世)も対象にする必要があったため、単独での調査が中心となりました。

4週間に及ぶ活動期間中には、40℃を超える気温や雨などの悪天候で、調査に出ることができない日もありました。また、急斜面で転倒したり、ガラガラヘビに遭遇したりするなど、危険な目にも遭いました。



行く手にヤツ(ガラガラヘビ)のシッポが・・・

調査そのものについては、恐竜を含めた脊椎動物化石などは発見できたものの、私の研究対象となるような良い標本は発見できませんでした。ただ、調査団としては、貴重な標本を採集することができました。また、私の発見した化石の中には、現地では同定ができなかった標本もあり、今後は他の研究者の協力を得て、それらを調べてみたいと思います。



砂岩層から露出する恐竜の肋骨

これまでは少数精鋭で野外調査を実施してきましたが、今回は学生を主体とした総勢15名を超える方々が参加しました。その目的の一つが後継者の育成で、単に調査方法を習得させるだけではなく、調査団を率いるためのリーダーシップや危機管理等も学ばせていました。このような取り組みについては、私自身も大いに学ばせていただきました。

これまでの野外調査では、活動期間中はほとんどテント暮らしでしたが、今回は山荘を借りて実施されたため、とても快適な調査となりました。この山荘は来夏もすでにロッキー博物館が予約しており、当地で調査を実施するとのことでした。私もぜひ来年度の調査にも参加したいと思います。

(学芸員 桂 嘉志浩)



夜に浮かぶオーロラ

(写真提供：御船町恐竜博物館 池上直樹氏)

資料館では、主として駐在員の3人が学校・地域支援の団体プログラムを担当しています。実は、駐在員3人とも4月に赴任したばかりで、最初は右も左もわからず、多くの方々に協力をさせていただいて何とか乗り越えてまいりました。

最初に我々が感じたのは、何とんでも自然史資料館の知名度の低さでした。そのため、金沢のほぼすべての小学校と近隣の学童保育のクラブに足を運び、校長先生等に資料館の説明をさせていただきました。校長先生方におかれましては、お忙しい中お時間をいただき、この場をお借りして御礼申し上げます。

おかげさまで、たくさんの小学校や学童クラブからお声がけいただき、夏休みにはこれまでにないほど、出前講座や来館のお申し込みがありました。また、夏休みを過ぎても、遠足の途中に来館していただいたり、クラスや学年の親子活動に使っていただいたりしております。

人気のプログラムは、「虹色万華鏡」。小学生から大人の方まで、熱心に取り組んでいただいております。出来上がった万華鏡を覗いて、感嘆する声があちらこちらから上がる様子を見て、満足いただけていると自画自賛しております。万華鏡以外にも、「ぷかぷか水族館」「ひらひらタネ模型」などいくつかのプログラムを展開しております。その中で、我々としては、単なる工作にとどまらず、「自然の中にある不思議」や「理科との関連性」などを意識しながら、講座を実施しています。

今年は元旦に令和6年能登半島地震が発生し、今なお困難な生活を送っていらっしゃる方も多いと思います。そのような中、被災地の子供たちに自然体験活動の機会を提供する「がんばろう 能登っ子！ 自然学校」が行われ、自然史資料館も、その事業に協力させていただきました。



団体プログラムの様子

8月初旬に開かれた「里海教室」では、本館の嶋田学芸員がアジの解剖を行い、子供たちに魚の体のつくりなどを解説しました。また、駐在員で「アンモナイトのレプリカづくり」を担当し、子供たちはアンモナイトについて学んだり、化石について学んだりしました。8月下旬に行われた「里山教室」にも、本館の中野副館長が「植物標本づくり」を担当し、本館周辺で採取した植物を標本にする方法について説明しました。また、駐在員で、「空気でっぽうで遊ぼう」を担当し、ペットボトル空気砲づくりや段ボール空気砲で楽しんでもらいました。能登の子供たちに様々な体験を提供できたことは、これからの活動の大きな励みになりました。

今後も、自然の豊かさや不思議さ、疑問を解決していく態度などを子供たちに伝えながら、学校・地域支援活動として、団体プログラムの体験講座や聞き耳講座の充実を図っていきたいと考えております。

(駐在員 杉澤 寿治)



里海教室 アジの解剖



里海教室 アンモナイトのレプリカづくり

予告

第38回企画展 「海の巨大生物展」

会期:2025年1月18日(土)～5月6日(火)

海は生命のゆりかごとも言われ、その神秘に満ちた水の世界は、私たちの想像を超える生き物たちで溢れています。広大な海を泳ぐナガスクジラの仲間の体長は約30mにも達し、これまで地球上に存在した動物の中でも最大級の大きさを誇ります。深海に潜むダイオウイカは、全長15mを超え、世界最大級の無脊椎動物として有名です。また、体重2tにも達するマンボウは最重量級の魚として知られ、世界で最も長い魚とされるリュウグウノツカイの体長は10mを超えます。オサガメは人が乗れるほど巨大で、その甲羅の大きさはおよそ3mにも達します。海の巨大生物たちの驚異的な大きさと神秘的な姿は、多くの人々を魅了し、自然の壮大さや生命の不思議さを伝えてくれます。

なぜ海にはこんなにも大きな生き物がいるのでしょうか?その巨大化の理由については様々な仮説があります。例えば、深海に生息する生き物は、外敵に襲われた時に身を隠す場所がなく、体を大きくする

ことが身を守る有効な方法の一つだと考えられています。ダイオウイカの場合、天敵であるマッコウクジラから捕食されにくいように、さらに巨大化したという説もあります。海棲哺乳類では、浮力がその巨大化に関係していると考えられてきましたが、水中における体温の保持と餌の確保のバランスが巨大化に深く関わっているとする説もあります。しかし、全ての海の巨大生物の謎が解明されたわけではなく、現在も研究が進められています。

この展示では、実物の剥製や骨格標本・写真などを通して、海の代表的な巨大生物とそれらが持つ興味深い特徴を紹介するとともに、その巨大化の謎に迫ります。さらに、これら巨大生物が直面する絶滅の危機や環境問題などについても解説します。海の巨大生物たちの迫力と不思議さに心奪われる展示を、この機会にぜひお楽しみください。

(学芸員 嶋田 敬介)



マンボウの剥製(1981年10月29日に能登町で採集)



イトマキエイの剥製(1981年2月6日に穴水町で採集)

利用案内

- 開館時間 : 9:00～17:00 (入館は16:30まで)
- 休館日 : 12月29日～1月3日

入館料 : 無料
駐車場 : 完備 (大型バス駐車可)

交通案内

【バスをご利用の場合】

金沢駅東口バスターミナル

- 『12 湯涌温泉ゆき』
- 『12 北陸大学薬学部ゆき』
- 『12 北陸大学太陽が丘ゆき』
→ 【銚子口】下車
→ 徒歩約10分
- 『95 北陸大学太陽が丘ゆき』
- 『95 北陸大学薬学部ゆき』
→ 【北陸大学太陽が丘】下車
→ 徒歩約10分

